

## 将棋と棋士をこよなく愛した

### 作家の山口瞳への追想

田丸 昇

私は、将棋を愛好した作家の山口瞳と将棋界との関わり、私的に交流したエピソードなどを元にして、山口の人生の一端を振り返ってみたい。

山口は、まじめで気が小さい会社員の日常生活と物悲しさを綴った『江分利満氏の優雅な生活』の小説で、一九六三年に三七歳で第四八回直木賞を受賞した。ある選考委員は「皮肉あり、私小説あり、随想ありで、筋というものは別にないけれども、全体から《ひとつの新鮮な詩》を感じた」と評した。

山口は「週刊新潮」の伝説的編集者だった斉藤十一から依頼され、『男性自身』という表題のエッセーの連載を一九六三年の末から始めた。自身の身辺雑記や率直な物言いを綴った軽妙な筆致は、読書の共感を呼んで支持された。そして一九九五年に六九歳で亡くなるまでの三一年間、一回も休載することなく

書き続けた。連載回数は一六一四回に及んだ。

山口は、幼少の頃から将棋が好きだった。三〇代に洋酒メーカーのサントリー（当時は寿屋）の宣伝部にPR誌の編集者として勤務していた頃は、将棋が強い同僚を自宅に呼んで指すことがよくあった。

やがて、山口の将棋好きは棋士たちに知られるようになり、一九六〇年代後半には人気棋士の芹沢博文八段、中原誠八段、米長邦雄七段（肩書はいずれも当時。以下の棋士も同じ）らが、東京・国立の山口の自宅を訪れて交流した。

治子夫人の話によると、芹沢八段は来るなり「奥さん、お茶なんかいりませんよ。ダルマ（サントリーウイスキーのオールド）と氷があれば十分です」と注文し、ぐびぐびと飲み続けた。芹沢は名うての酒豪だった。中原八段が来たときに、有名蕎麦店の人が茹でたての蕎麦を出すと、中原は「うまい蕎麦は、すぐに食べなきゃ」と言って、色紙に揮毫していた筆を箸に持ち替えた。夫人は「子どもみたい」とほほ笑んだという。山口は、米長七段と競馬の話で盛り上がった。米長が明子夫人と弁当持参で競馬場に出かけ、立見席で観戦することに好感を覚えたという。

山口夫妻は、明晰な頭脳で一流棋士として活躍している彼ら

の素顔や性格が明るくて親しみやすいことに驚いた。山口の将棋熱はさらに高まっていた。

山口は自ら働きかけて、文芸誌の「小説現代」で『山口瞳血涙十番勝負』という自戦記を兼ねたエッセーの連載を一九七〇年から始めた。山口が当代の一流棋士一〇人と、「飛車落ち」のハンディ戦で対局する企画だった。当時は世間あまり知られていなかった将棋界の有様や棋士の姿を、将棋ファンのみならず一般の人たちにも伝えたい、という意図があった。

山口は『血涙十番勝負』で、大山康晴名人、中原十段、二上達也八段、原田泰夫八段、米長八段らの棋士と対局した。こうした「お好み対局」では、プロがアマに勝ちを譲ることが時にある。しかし、棋士たちと山口は真剣勝負のように戦った。

プロ棋士を相手に懸命に戦って呻吟する様子を率直に綴った自戦記は、その健闘ぶりや心持ちが読者の共感呼んだ。また、文中で紹介する棋士のユニークな素顔、少し辛口の棋界評論などによって、世間の将棋と棋士に対する関心は高まっていた。対局で記録係を務めた奨励会員（棋士の卵）には、温かい言葉で激励した。

山口は『血涙十番勝負』で、三勝六敗一分の成績を挙げて大いに健闘した。《これは僕の血と涙の書である。いま、アベバ

と一緒に一万メートルを走ったような気分である。全棋譜は、決してつくられたものではない》と、最後に綴った。

この企画は好評を博した。引き続き『続血涙十番勝負』が始まり、山口は木村義雄十四世名人、塚田正夫九段、内藤国雄九段、加藤一二三・九段、大内延介八段らと、「角落ち」のハンディ戦で対局した。

私が作家という職業の人を初めて見たのは、奨励会（棋士養成機関）の三段だった二〇歳ぐらいの頃。東京・千駄ヶ谷の旧将棋会館のロビーで、多くの棋士と談笑していたのが山口だった。棋士になれば、あんな著名人と親しく話ができるんだと、羨望の思いを抱いたものだ。

私は二〇代はじめの頃、同世代の奨励会員らと共同で、『棋友』という表題の同人雑誌を定期的に出していた。私たち同人にとつて、本作りの作業はもちろん初めての経験で、みんな書いた自戦記・講座・随筆などの文章は稚拙な内容だった。ただ若者が抱く夢と熱気は充満していたと思う。一九七一年に創刊した『棋友』は、二年後に諸事情によって休刊することになった（通巻で一三号）。

一九七三年二月。前年に四段に昇段して棋士になった私（当時二二歳）は、『棋友』を山口に読んでもらいたいと思い、バツ

クナンバーを何冊か自宅に送った。将棋に例えれば、アマ級位者が自分の棋譜をプロ高段者に講評をお願いするようなものだが、恐れを知らないのは若者の特権である。

それから数日後、私のところへ山口から返信のハガキが届いた。《「棋友」有難う。このテの雑誌は大好きです。マラソン大会からミジメ君の話まで、全部読みました。休刊は、なんとも残念です。おヒマが出来ましたら、ぜひ遊びに来てください。何人でも来られても歓迎します》という文面だった。

私はとてもうれしかった。その好意に甘えて、同人仲間で弟子である沼春雄三段と一緒に、山口の自宅を訪れた。白亜の洋館風の建物だった。私たちは応接間に通された。奥の壁には、高さ三メートル、幅四メートルほどの大きな書架が設置されていて、文学全集、事典、美術書などがぎっしりと並んでいた。

山口は、自宅で定期的に棋士から指導を受けていた。その棋士は山口英夫五段。中央線の沿線に住んでいる若い棋士、という山口の希望を受けて人選された。山口五段は「英ちゃん流」と呼ばれた中飛車を創案した棋士で、愛称が戦法名に付いた初めて例だった。

当日は月に一回の指導日。応接間に将棋盤が五面ほど並べられていて、テレビで見たことがある著名人が将棋を指していた。

タレントの大橋巨泉だった。ほかの参加者は、放送作家の安倍徹郎、競馬評論家の赤木駿介、出版社の編集者など。山口はその将棋仲間の集まりを「山口組」と称した。あの団体とはもちろん関係ない。飛び道具は、将棋の駒だけである。

山口は、盤は榎（かや）、駒は黄楊（つげ）、駒台は桑（くわ）と、将棋の道具は最高級の材質のものを設えた。脇息やちり箱の備品も用意した。まるでプロ公式戦の対局室のようだった。

山口は「キャウジンの弟弟子ですよ」と、私を巨泉に紹介した。キャウジン（狂人）とは米長八段のこと。奔放で時には常軌を逸したような発想や生き方をしていたのを、肯定的に表現した。

巨泉は大学時代、麻雀よりも将棋が好きだったという。その後、山口と親しくなったのをきっかけに将棋に熱中し、米長に個人指導を受けていた。巨泉が司会を務めていた深夜の人気番組「11PM」では、若手棋士同士の「目かくし将棋」、巨泉と女流棋士の対局など、将棋の企画をたびたび取り上げた。中でもユニークだったのは、棋士が公式戦で指した悪手を「次の一手」に出したことで、視聴者に大受けだったという。巨泉ならではのアイデアであった。

私は巨泉と「飛車落ち」の手合いで指した。山口の影響を受けて定跡に精通していて、攻めが強かった。アマ二段ぐらいの

棋力があつた。

山口とは「角落ち」の手合いで指した。同じ大駒落ちの飛車落ちに比べて「平手」に近く、アマ四、五段の強豪でもプロに勝つのは大変である。山口の将棋は、定跡をきっちりとして習得して本格的だった。相撲のハズ押しのように、じわじわと攻めて優位を広げていく指し方は、プロとの駒落ち戦で力を発揮した。私は別に緩めたわけではないが、いつも負けそうになった。

山口は自身の将棋について、「序盤は有段者、中盤は一級、終盤は六級」と控えめに語った。将棋ファンの中には「どうせ旦那芸さ」と冷ややかに言う人もいたが、町道場の荒くれ将棋とは一線を画した。「将棋は男の芸事」だと提唱し、棋士から指導を受けることが一番の上達法であると説いた。

山口組のメンバーが、将棋会で合間にかわず雑談の内容は多岐に及んで面白かった。巨泉が所有した馬が競馬のレースで優勝した、安倍が脚本を書いている時代劇『必殺仕置人』が同じ時間帯の『木枯らし紋次郎』を視聴率で抜いた、赤木が時代小説で作家デビューする、などと明るい話題が多かった。

山口には当日、NHKから将棋番組への出演依頼があつた。中原名人と角落ちの手合いでお好み対局を指す企画である。山口が「テレビ将棋はなあ……」と渋った様子を見せると、巨泉

が「中原なんか、やつつけちゃいなさいよ。別にハゲなんか気にすることはないでしょ」と、励ましとも冷やかしくもつかぬことを言って、一同は大笑いした。

夕食の時間になると、みんな地下の食堂に席を移し、治子夫人の心づくしの手料理に舌鼓を打った。そして、お酒がほどよく回ってくると、雑談から議論に変わっていった。

巨泉「奨励会制度に問題がある。若手を伸ばさない団体は発展しない」

赤木「三段から四段になるのに、年間であつた二人だけなんですね」

山口「将棋連盟の運営がまずいんだな」

安倍「将棋界はジャーナリズムが確立されていませんね」

田丸「そこで私たちは、ちゃちですが同人雑誌の『棋友』を出しました」

巨泉「競馬界の体質も昔は古かつたが、ジャーナリズムの発展で良くなった」

山口の自宅での将棋会は、優雅な将棋サロンの趣と、談論風発の雰囲気混在した、居心地の良い空間だった。

また、近くに住む漫画家の滝田ゆう、編集者の嵐山光三郎、作家の常盤新平、俳優（後年に映画監督）の伊丹十三など、将棋を指さない著名人もよく訪れた。山口の自宅は「国立文化村」

の中心地になっていたようだ。

私たち『棋友』の同人は、その後も山口の自宅で行われた将棋会にたびたび呼ばれた。将棋を指すのも話をするのも、若者たちとのほうが楽しかったようだ。

将棋会が終わった後、山口の自宅から一キロほどの南武線・谷保駅の近くにある、もつ焼きがおいしい「文蔵」に行くことがあった。その小さな居酒屋の店主は、山口の著書『居酒屋兆治』の主人公のモデルとして知られ、高倉健の主演で映画化された。夫婦でひっそりと三〇年ほど営み、二〇〇六年に諸事情で閉店した。

ある日、山口は急ぎの原稿を書くことになり、別の部屋の文机の前に座って書き出した。四〇〇字詰め原稿用紙に万年筆で執筆している様子は、外からちらりと見えた。将棋を指しているとき以上に、当然ながら真剣な表情だった。

山口が『週刊新潮』に長期連載していた『男性自身』のエッセーでは、将棋界や棋士の話題がよく登場した。

一九七六年四月二〇日、現在の将棋会館の落成式が開かれた。来賓として出席した山口、放送作家の安倍、田丸五段、真部一男五段、伊藤果四段の五人は、式の後には新宿の歌舞伎町に連れ立って行った。まだ陽が高かったので開いている店は少なく、

新潟料理の店にたまたま入った。山口は、その日の様子を次のように綴った。

《ゴールデン街で飲み、それから、田丸さんと安倍さんの三人で、田丸さんの婚約者である谷川治恵嬢の家へ行った。(中略) 谷川嬢は、さすがに棋士の妻となる人だけあって、将棋盤を出して待っていた。安倍さんと谷川さんの将棋を見ながらウイスキーを飲んだ》

説明を加えると、谷川嬢は当時アマで、現在は女流棋士五段。実家の小金井と山口の自宅の国立は同じ方向なので、成り行きからタクシーに三人で同乗して向かった。それから一ヵ月後、私は谷川と結婚式を挙げた。山口にも出席してもらった。

山口には長年の願望があった。プロ野球の監督を一試合だけ務めること、名人戦の第一局の観戦記を書くことだった。

その後者が一九七四年の名人戦(中原名人―大山九段)第一局で実現した。山口の観戦記は、作家らしい洞察力のある棋士評、対局室の細やかな描写、独自に得た様々なエピソードなど、将棋関係者や読者に好評だった。敗勢になった中原名人の泣きそうな表情については、『市谷の自衛隊のバルコニーに立った三島由紀夫の顔だと気がついた』と表現した。また、『私は、棋士にはどうして「人間国宝」とか「無形文化財」の称号が与

えられないのか」と、棋士を称賛する持論を述べた。

将棋と棋士をこよなく愛した山口は、自ら将棋連盟の「宣伝部長」と名乗り、将棋の普及に尽くす労をいとわなかった。ところが、ある時期から将棋界や棋士と距離を置くようになり、将棋も指さなくなつた。

治子夫人の話によると、将棋界の宣伝係として役目を果たした気持ちと、健康上の理由からだという。将棋を指すと血圧が上がり、アイスノンを頭に巻いて指すこともあつた。ほかに、あるトラブルが起因したようだ。詳細については言葉を濁したが、山口がとくに親しくしていた二人の棋士と考え方で行き違いが生じ、不和になつたという。山口の思い入れが深くなるにつれ、それを鬱陶しいと感じた状況があつたのかもしれない。山口はその後、甲子園で活躍した地元の都立高校の野球部を応援したり、温泉旅行に出かけたり、水彩画を描いたりして、余暇をのんびりと過ごした。

一九八七年に河口俊彦六段、観戦記者の東公平らが中心になつて「将棋ペンクラブ」が設立された。将棋ジャーナリズムの活性化、将棋に関わるライターの待遇改善、文壇将棋会の開催、などを趣旨にした。山口はその際に相談を受けた。趣旨に賛同するとともに、優れた文章を書いた人たちに贈る「将棋ペ

ンクラブ大賞」の選考委員を引き受けた。さらに、山口は以前に勤務していたサントリーに持ちかけ、大賞の賞金を協賛するように話をつけてくれた。

山口は、将棋ジャーナリズムの確立をかねてから提唱していた。良い批評家がない世界は発展しないと考えていた。その意味で、観戦記者らの地位や待遇の向上を願っていた。実は、山口は作家になる前、少ないスペースで簡潔に書かなくては行けない、新聞の将棋欄の観戦記を読んで文章を勉強したという。とくに加藤治郎名誉九段の観戦記が参考になつたそうである。

私は、山口が長期連載していた『男性自身』シリーズでの軽妙で滋味あふれる筆致が好きだった。一九七八年から成人の日（当時は一月二五日）の新聞紙上にサントリーの広告が毎年掲載されたとき、山口は新成人に向けて簡潔なメッセージを送つた。年に一回のうえに、翌年は対象の読者は変わるが、いつも素晴らしい内容だった。そのひとつを抜粋で紹介する。

《二十歳の諸君！ 今日から酒が飲めるようになったと思つたら大間違いだ。今日から酒を飲むことについて勉強する資格を得ただけなのだ。仮免許なのだ。酒を飲むことは分を知ること、酒の上の約束を守りなさい。諸君は、いつでも、試されているのだ。ところで、かく言う私自身であるが、実は、いまだに、仮免許がとれないのだ。諸君！ この人生、大変なんだ》

人生の先輩が新成人に助言する形になっているが、最後は年代の違いを超えて共感し合うことで、新成人だけでなく一般の読者からも評判を呼んだ。

山口は晩年、糖尿病を患い、前立腺がんの疑いで除去手術を受けた。ほかの部位にも腫瘍が生じ、入院を繰り返していた。入院する前に黒沢明監督の映画『生きる』を見ていたら、家族に「こんな映画を見るのか」と驚かれたが、山口は葬式場面の左下全を見たかったという。入院中に検査の合間に外出許可が出ると、後楽園ウインズで皐月賞の馬券を買ったり、ホテルでコーヒーを満喫した。

一九九五年三月、私は風邪が悪化したので、地元の荻窪病院に行った。その待合室で山口夫妻とばったり会った。二月に受けた検査の結果を聞きに来たという。久しぶりに会った山口からは「君はエイズの検査かね」と、とんだ挨拶を受けてしまった。毒舌は健在だった。私が山口の姿を見たのは、それが最後となった。

山口の病状はますます悪化していった。それでも七月に直木賞の選考会に出席して、作家仲間と小説の話をしていると、体の痛みをしばし忘れたという。八月に容体が急変すると、小金井の病院のホスピス棟に緊急入院した。

そして一九九五年八月三〇日、山口は肺がんによって六九歳で死去した。

山口は『男性自身』のエッセーを三一年間にわたって連載したが、死が急であつたために、結果的に一回も休載することはなかった。その最終回には、《どうやって死んでいったらいいのだろうか。そればかり考えている。唸って唸って（あれを断末魔というのだろうか）。カクンと別の世界に入ってゆくのだろうか》という一節が書かれていた。

将棋連盟は、山口が将棋界に果たした功績に感謝し、七段の免状を追贈した。

私は、山口とそれほど濃密な付き合いをしていたわけではないが、その時々思い出しは今でも鮮明に残っている。

山口は京都に旅行したとき、地元の知人に紹介されてよく通った祇園の店があつた。小料理屋「山ふく」で食事をしてから、バー「サンボア」に寄るのが定番だった。私も京都に行くとき、同じコースをたどることにしている。

そのバーの七〇代のママは、マスターの急死によって三〇代で初めて店に入った。洋酒の銘柄もろくに知らなかったが、常連客の山口に助言されてカクテルの作り方を少しずつ覚えた。私がおのひとつのドライ・マティーニを飲んで、山口の思い出

をママに語っていると、当人が扉を開けて入ってくるような気がした。

私は東京・西荻窪の地元の居酒屋で、以前から知っていた山口の子息の山口正介（作家で映画評論家）をたまに見かけることがある。席が隣同士になると、生前の山口や山口組のメンバーについて雑談をかわした。山口の自宅にあった五組の立派な盤駒のことを聞くと、ある伝手を介してすべて処分したという。話しぶりでは、安価にたたかれたようだ。子息は将棋を指さないので仕方ないが、誰かに形見として一組でも譲っていたらよかったのにと、私は残念な思いをした。【文中敬称略】